

今日の箇所は「それから、霊はイエスを荒れ野に送り出した。」と始まっています。この「送り出す」という語は「投げ出す」「追い出す」というニュアンスのある語です。イエスが、汚れた霊にとりつかれた男から汚れた霊を追い出した時の「追い出す」と訳された同じ言葉が用いられているのです。神さまが聖霊によって、イエスを荒れ野へ追い出したのです。その目的は、サタンに誘惑を受けるためでした。そして四十日間とどまりました。この四十という数字は、聖書の中では、苦しみや試練の時を表す象徴的な数字で、長いまとまった期間を表します。「サタン」は元来、ヘブライ語で「告白する者」「敵」を意味する言葉です。ユダヤ教ではサタンは墮落した天使で、神さまと人間との関係を壊し、破滅をもくろむ天使たちの主とみなされています。「誘惑する」と訳された語には「誘惑する」と「試みる」「試練にあわす」の両方の意味があります。この箇所は誘惑物語といわれていますが、むしろ神さまから離れるように試みることです。サタンはイエスを試し、救い主としての働きを挫折させようと働きかけましたが、それは聖霊の導きの中で起ったことなのです。誘惑の内容について、マタイおよびルカ福音書には三つの誘惑の記事が記されていますが、マルコ福音書には「サタンから誘惑を受けられた」としか記されていません。そして、その後「その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた」と記されています。この言葉はマルコにのみ見られ、野獣と共にいたということです。イザヤ 11:6~10 には人と野獣が共に生きていることが記されています。当時のユダヤ教において野獣との平和的な共存が救い主の時代を実現すべき救いの象徴であったことを考えれば、マルコ福音書の著者は今日の箇所に記されている「野獣と一緒にいた」と「天使たちが仕えていた」という記事で、救いは既にサタンから解放された荒れ野において実現していることを示唆しているのです。イエスの荒れ野における野獣との生活は、このイザヤ書の言葉の実現であるとマルコ福音書の著者は記しているのです。そして、そのことは、15 節の「時は満ち、神の国は近づいた。」ことを意味しているのです。

誘惑は神さまから来るのでしょうか。それは分かりません。それでも誘惑あるいは試練の中で、神さまに呼びかけることはできます。受難のイエスは神さまにこう呼びかけています、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」(マコ 15:34)。神さまはイエスを見捨てなかったことを、私たちは知っています。それならば、私たちは自分に絶望することがあっても、神さまに対してそうする必要はないのです。